

高等学校「倫理」の問題と可能性

和田倫明（わだみちあき）

（産業技術高専荒川キャンパス）

1. 問題意識のずれ

私は10年前、次のように言いました。

「(略) 大学の倫理学の授業なり講座なりにも危機感があるということもまた、承知している。しかし、高校教育（後期中等教育）はいったんそこで完結するものなのであって、大学教育（高等教育）のためにあるものなのではない。高校倫理教師は、高等教育になど進まない過半数の高校生のためにも、倫理学になど興味のない大多数の高校生のためにも、たとえば倫理的判断の練習をさせるためなどに授業をするのであって、それは倫理学者を増やすためでも、大学の倫理学の講義を充実させるためでもない。高校教育におけるいずれの教科・科目であれ、大学教育にとって不都合だからという「だけ」の理由でその在り方を左右される必然性は全くない。」

（「高校倫理の授業で起こっていること」日本倫理学会第52回大会報告集 pp.15 2001）

倫理学会での発表なので倫理学という言葉を使っていますが、もちろん哲学と置き換えてもかまいません。四年生大学進学率が2009年に50.2%になったことを除けば、10年後の今でもこの考えを修正する気はまったくありません。

率直に言えば、大学の先生方の問題意識がどこにあるのか、高校の先生方には今ひとつ腑に落ちていないのではないかと思うのです。数学や英語でリメディアル教育の必要が盛んに言われる様に、地歴公民でもそのような基礎知識の不足が問題になっているということなのか。あるいは、理科離れが話題になったように、人文系の学問を志す高校生が少なくなってきたということなのか（昔は多かったのですかね？）。あるいは、高校でカントぐらい教えといてくれよ、やりにくくなって仕方がないよ、という程度のことなのか。

ただこのいずれの問題意識にしても、そのまま高校の先生方が義務教育に感じていることに平行移動できてしまうのです。義務教育に身につけているはずの知識を当てにしている授業が成立しない。とにかく何でもよいから勉強するために進学してきて欲しい。漢字の読み書きなんて贅沢は言わないから、せめてカタカナくらいは間違えないで読み書きできるようにしてきて欲しい。・・・

2. 何が問題なのか

このような状況のなかで、高校の先生方が取り組んでいることは、そんな生徒たちに少しでも「現代社会」なり「倫理」なりに興味をたせて、授業に取り組みせたいということです。正直なところ、大学の事情などかまっている暇はありません。私たちが何を言っても、義務教育の先生方にはそれどころではないのと同じように。

実際のところ、高等学校の学習指導要領では、すでに昭和 53 年（1978 年）版から、思想史学習ではない「様々な工夫」をしてよいことになっています。学習指導要領には、具体的な哲学者の人名など一つも書かれていません。それなのに、なぜ今、高校で「倫理」にとらわれない「哲学」教育が求められなければならないのでしょうか。学習指導要領で見る限り、「倫理」の枠組みの中でも、そのようなことはいくらかでも可能なのです。

一つの問題は、検定教科書と入試の関係にあります。教科書を改訂していて「もうこんなのはいまさら、いらぬんじゃないの？」と思って書き直すと、編集から必ずチェックが入ります。入試に出ているので入れていただいて・・・といった具合です。そしてもちろん、入試のほうは、教科書に出ているから出すのでしょうか。どちらが卵で、どちらが鶏か、という議論は不毛でしょう。

二つ目は、教師の問題です。これも私が関係していた教科書で、思想史に偏らずにテーマ式を意識した構成にしたところ、採択数がぐんと落ちました。「ソクラテスが二箇所出てきて分かりにくい」というクレームは、象徴的です。専門外の先生が教えるとき、もっとも教えやすいのは歴史の順番に人名が並んで、それぞれの人名にキーワードがくっついているというものです。専門の先生が少ないのは現実ですから、そこから始めないと解決はできません。私だって歴史や政経を教えることがあるのですからお互い様です。

三つ目は、「倫理」だけの問題ではないのですが、おそらくさまざまなテーマや課題を取り上げようとするときに、多くの生徒には、前提となる常識や経験や関心が欠けているということがあります。生徒が置かれている生活環境や文化があまりにかけ離れていて、話が通じていない感じというのを、多くの先生方が持っています。いわゆる「中の上」くらいの学校から、ようやく話が通じる感じを持てるようになります。テーマ型の授業の難しさはそこにあって、通じない感じの学校では、なかなか深まらずに何をやっているのか分からなくなり、むしろ知識丸暗記の方がお互いに扱いやすくて幸せなこともあります。いっぽう「中の上」の学校は大学受験のためのフォローをもっとも必要とする学校でもあるので、入試対策を重視すると、だんだんテーマ式はやりにくくなります。「上」クラスの学校になって、ようやく両方の条件が整うでしょう。しかし、それではほんのわずかな生徒にしか開かれません。

3. 何が可能なのか

ではどうすればよいのでしょうか。

一つは、入試問題を作り、検定教科書を作っている大学の先生方に、大学入試と検定教科書をダイナミックに一気呵成に同時に大転換していただくことです。もっとも、単に高校の倫理・哲学の授業を充実させたいということであれば、まずは入試で「倫理」を必修にしてもらっただけでも効果的です。何をやろうとしても、入試にないからカリキュラムに置かない、ということになってしまったら、元も子もありません。

それは無理なののでしょうか？ でしたら、次に考えられるのは、ゲリラ的に、楽しみながら様々な仕掛けを用意することでしょうか。哲学カフェなどというのがあります。世田谷区は特区制度を利用して「教科日本語哲学」を中学校で行っています。ただこれらの試みは、限られた人にしか開かれていません。

しかし、たとえば新しい学習指導要領の「現代社会」は、あらゆる社会事象を「幸福・正義・公正」の視点から考えようという提案をしています。今の公民科教育の枠組みの中でも、いろいろと思いついたことはできるのです。

私は高専で、必修科目として以前は「倫理」（3 学年 2 単位）、現在は「現代社会」（2 学年 2 単位）を主として担当しています。「政治・経済」が必修なので、「現代社会」も事実上「倫理」と同様の内容を扱っています。そこでは高校の検定教科書を使って、普通高校で文系の科目をやるのは真っ平だと高専を選んだ学生たちに、いろいろと工夫しながら授業をしています。

そのほかに、高専ならではの選択科目を担当してきました。(1)「人文社会特別研究」（3, 4 学年共通選択）では、下村湖人『論語物語』を輪読しています。20 名弱の学生に、一章ずつレジュメを作らせ、大体一人二回、半期で一冊読み終えます。(2)「倫理学」（4 学年選択科目）ではコーエン『倫理問題 101 題』を読みます。これは「問題」のパートはよいのですが、「ディスカッション」のパートは、学生にはきわめて難解です。それでも斜め読みをさせます。知らない人名や分からない内容は飛ばして、とにかく読んで、概略をまとめ、その後に自分の意見を書かせます。同じ問題を取り扱った学生をなるべく集めて同時に発表させます。(3)「法学」（5 学年選択科目）ではウィットベック『技術倫理 1』を読み、そのあと自分でテーマを決めて発表させます。(4)夏季集中講座の「都市教養特別研究」（4, 5 年共通選択科目）では、4 日間で 30 ヶ所以上、電車と路線バスと徒歩で、東京近郊の神社仏閣教会モスクをひたすら廻り、レポートを出させます。

高校から大学の前半にあたる時期、学習指導要領も大学入試もないのをよいことにこんなことをしていますが、何かのヒントになるでしょうか。